

## 遠州灘に天然親ウナギの放流を行います

内水面漁業研究所 内水面養殖グループ

平成 30 年漁期はシラスウナギの不漁により、流通価格が高騰しました。これまで、ウナギ資源の回復を目的として、愛知県と漁業者は、産卵のため海へ下るウナギの漁獲の自粛、シラスウナギ採捕日数の短縮、ウナギの放流などに取り組んで来ました。ウナギの放流では、養殖魚が一般的に使われますが、今回は天然ウナギを放流することで、より積極的な資源増大に取り組めます。

放流は、今秋に竣工した調査船「海幸丸」で天然ウナギを搬送し、12 月中旬以降の海況の良い日に、伊良湖沖南東 30km の遠州灘において実施します(図 1)。放流ウナギ(約 90 尾)は、6~11 月に県内の沿岸で定置網やカゴ等で漁獲された大きなウナギ(図 2)を水産試験場に集め畜養したもので、放流前に行った成熟段階調査では、すべての個体が下りうなぎの特徴である黒味を帯びた銀色となっており、放流に適した状態であることを確認しています。なお、放流するウナギには、放流魚であることが判別できるように、左目の目尻にイラストマーという蛍光色素(黄緑)で標識してあります(図 3)。標識されたウナギを捕獲された場合は、再放流いただくとともに、産卵場に向かう経路等を把握するのに重要な情報となりますので、捕獲場所や日時について内水面養殖 G(電話 0563-72-7643)までご一報ください。

今回放流する天然ウナギが産卵場のマリアナ諸島付近まで到達し、親ウナギとして産卵に加わり、資源が増大することを期待しています。



図 1 放流場所



図 2 放流する天然ウナギ

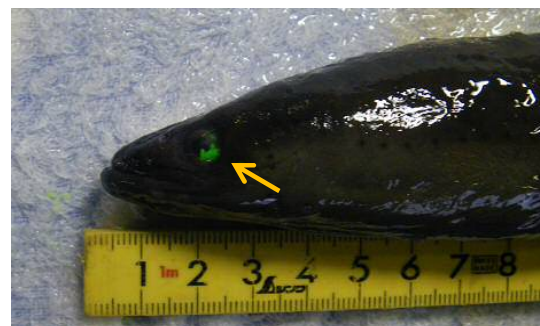


図 3 イラストマー

## 冬季にシャコの水揚げ量を制限する資源管理を進めています

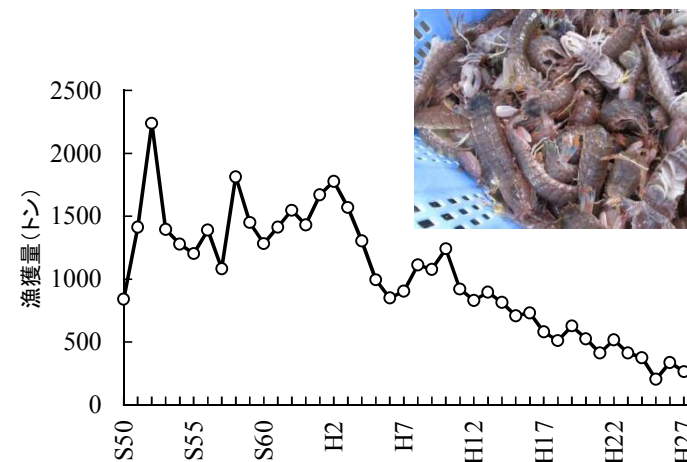


図 4 愛知県のシャコ漁獲量

漁業生産研究所 海洋資源グループ  
愛知県は全国的にも有名なシャコの産地です。しかし、全国と同様に、愛知県でも漁獲量が減少し、低水準となっています(図)。

特に、平成に入ってから産卵期前の冬に漁獲する割合が大きくなったことから、愛知県まめ板網漁業者組合は、産卵する親を春まで残すために、平成 21 年から冬季の水揚げ量制限を実施しています。この取り組みは、身入りの悪い冬季に獲り控えることで、春に質の良いシャコを多く獲ることができるため、漁業者の収入の安定化にもつながります。当グループでは漁獲量や漁場調査

の結果からシャコの資源量を推定しており、漁業者はその結果を元に制限量を決定しています。今年度は、制限期間を 12 月 1 日から 3 月 15 日までとし、1 日 1 隻あたり 2 カゴ(約 40kg)以内の水揚げとすることが決まっています。

シャコはエイなどの大型魚類により捕食されており、資源の減少はその捕食圧の影響を受けている可能性もあります。当グループは期間中も成熟状況を調査して漁業者へ情報提供するとともに、今後は捕食圧の調査を行うことで漁業者の取り組みを支援していきます。

## 六条潟におけるアサリ初期稚貝の発生状況

本場 漁場改善グループ

三河湾東部に位置する六条潟は、毎年大量のアサリ稚貝が発生する奇跡の干潟として知られ、六条潟のアサリ稚貝は、夏から秋にかけて県内各地の地先漁場に移植放流され、本県のアサリ漁業を支える貴重な資源となっています。しかし、今年度は稚貝の発生量が例年に比べやや少なく、生息場所が沖寄りに偏っていたことから、漁業者の方々は稚貝の確保に苦労されていたようです。

アサリは春と秋に産卵のピークを迎えますが、放流用として利用される稚貝は、主に前年の秋に産まれた稚貝であることから、当グループでは秋に着底したアサリ稚貝の発生状況について調査しています。11 月 26 日に行った調査では、殻長 1.0 mm 未満のアサリ着底稚貝が約 8 万個体/m<sup>2</sup>確認され、昨年同時期の 850 個体/m<sup>2</sup>に比べ、多く発生していました。また、直近 5 年の比較でも、着底稚貝の発生が非常に多かった平成 26 年度に次ぐ発生量となっており、来期に採捕されるアサリ稚貝の増加が期待されます。

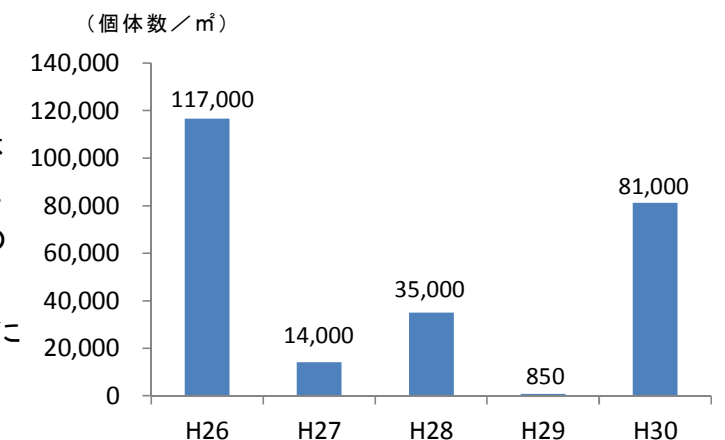


図 5 秋季におけるアサリ着底稚貝の発生密度

